

リーディングスパンテストにおけるフォーカス効果の検討

ーターゲット多肢選択による得点群間差比較ー

西 川 裕 子

〈目的〉

リーディングスパンテスト（以下 RST）は刺激文を読み上げながら文中の単語を覚えるという、記憶範囲テストである（Daneman, & Carpenter, 1980）。

RST の成績に影響する要因の 1 つにフォーカス語がある（学阪他、2002）。フォーカス語は「理解の中心となる語」と定義され、フォーカス語が覚える語（ターゲット）と一致する場合としない場合では、RST 成績の高群と低群において成績変動に差がみられる。低群ではフォーカス語がターゲットではない場合は顕著に成績低下がおこるものの、高群においてはそれほど顕著な低下はおこらない。高群の方がフォーカス語に依存していないのである。

本研究では、高群と低群がそれぞれどのようにフォーカス語を用いているのかを詳しく調べるために、ターゲットを多肢選択とした RST（以下 3 tg-RST）を用いて実験を行った。

〈方法〉

予備実験で、50% の一致率で文内最重要と判断された単語をフォーカス語とし、3 tg-RST を作成した。実験参加者は刺激文に 3 つあるターゲット候補から自由に 1 語を選び、再生することを求められた。同時に、刺激文にターゲットが 1 語指定されている通常の RST（以下 1 tg-RST）も行い、RST の得点差および高得点群と低得点群間の差を比較した。

〈結果〉

1 tg-RST と 3 tg-RST の成績は全体平均に差はなく、中程度の相関であった。だが、1 tg-RST と比較して 3 tg-RST においては高群では成績が下降し、低群では上昇していた。高群と低群でターゲット再生数におけるフォーカス語率の有意差は検出されなかった。数値的には高群の方が高い傾向にある。フォーカス語の再生位置は、低群では刺激文のフォーカス語位置に沿い、高群では沿わない結果となった。

〈考察〉

フォーカス語率より、有意差は出なかったものの、高群の方がフォーカス語を多く使っている可能性が示唆された。また、再生位置より、低群のフォーカス語利用が確率的である一方、高群は任意利用である可能性がある。

フォーカス語への依存が低いとされる高群においても、フォーカス語使用に制限がない場合にはフォーカス語を有効利用して RST を行っていることが示された。フォーカス語の制御を上手に行っているのである。一方、低群は能動的なフォーカス語利用ではないためにフォーカス語の制御が上手いかず、その差が高群と低群を生み出す個人差ではないかと考えられる。